

ENG アトラス めまい・平衡機能障害診断のために

小松崎 篤 著

このたび、医学書院から待望の『ENG アトラス』が出版された。ENG (electronystagmography, 電気眼振計) と言うまでもなく、眼振を含む眼球運動の電気的な記録・検査のことである。眼振や眼球運動の異常はめまいや平衡障害時に多く出現し、病変部位や原因疾患を同定する上で極めて有用であるが、その診察所見を客観的かつ定量的に記録し、分析や比較を可能としてくれるのがENGである。めまいや平衡障害を扱う耳鼻咽喉科、特に神経耳科、神経内科、脳神経外科などにおいては必須の検査である。ENGは基本的に両眼の上下、左右に付けた電極で両側の眼球の上下、左右の動きの速度、加速度、振幅が表示される。

著者の小松崎篤先生は日本耳鼻咽喉科学会理事長も歴任された斯界の大家であるが、特に神経耳科学の領域では世界を代表する第一人者であり、PPRF (paramedian pontine reticular formation) の発見、OKP (optokinetic pattern test) の開発などその業績は枚挙に暇がない。この『ENG アトラス』は700件もの図のほとんどが自験例という、まさに小松崎先生ならではの快挙といえる。

本書はA4サイズで438ページに及ぶ大著であるが、アトラスという性格上大判なのは自然ともいえる。構成は非常にわかりやすく、第一部「総論」、第二部「各論」と大別され、前者には、歴史、原理、長所と短所、記録の実際、各種の検査法が含まれている。したがって、単にアトラス（図譜）ではなく一種のマニュアルの役割も果たしているといえる。特に「ENG記録の実際」ではアーチファクトについて12ページにわたって丁寧に記載され、極めて有用である。

各論は末梢前庭障害と中枢神経疾患に大別されて

おり、前者にはメニエール病と遅発性内リンパ腫、前庭神経炎、めまいと急性感音性難聴、良性発作性頭位めまい症、内耳炎、両側性前庭障害、聴神経腫瘍と小脳橋角部障害が含まれ、内耳炎以外は17～30ページの豊富な実例が挙げられている。また、中枢性疾患は脳幹障害と眼球運動の異常（40ページ）、小脳障害と眼球運動の異常（105ページ）、大脳障害と眼球運動の異常に大別され、病変部位による実例と解説がみられる。我々神経内科医に関係の深い脊髄小脳変性症もここに含まれ、多系統萎縮症だけで4例の症例が提示されている。最後には先天眼振に約30ページが割かれ、その多様性がよく理解できる。

総論、各論共に各章や大きい項の最後には適切な文献が配置され、より詳しい検索の便も図られている。随所の疾患の解説なども豊富な臨床経験に基づく先生ならではのもので、例えば聴神経腫瘍の章ではその名称の由来が簡潔にまとめられている。小職は医学部の学生の頃、当時新進気鋭の小松崎先生の眼球運動の勉強会に参加させていただいたが、その時のことを懐かしく思い出した次第である。

本書はアトラスという性格上も、専門家のみならず初学者や研修医にとっても学ぶところが極めて大きい。神経内科、脳神経外科、小児神経、神経耳科、神経眼科にかかわる全ての医師・研究者の皆さんにお薦めできる一冊である。

国立精神・神経医療研究センター・理事長
水澤英洋

A4・頁448 2017年05月
定価：本体8,200円＋税
[ISBN978-4-260-02131-9] 医学書院刊